慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	A・F・K・オルガンスキー著『政治発展の諸段階』
Sub Title	A. F. K. Organsk, The stages of political development
Author	松本, 三郎(Matsumoto, Saburo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1967
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.40, No.12 (1967. 12) ,p.120- 123
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19671215-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

A. F. K. Organski,

The Stages of Political Development

Alfred A. Knopf: New York, 1965, xiii+229 pp.

A・F・K・オルガンスキー著

『政治発展の諸段階』

—

著者は、一九二三年生まれのミシガン大学教授で、訪問教授として、フレッチャール国際関係大学院やコロンビア大学でも国際政治を教える売れじ子の一人である。処女作は好著“World Politics”(1958)で、他に“Population and World Power”(1961)などがある。行動科学研究のメッカであるミシガン大学で教えているだけに、新しい政治学への興味も深く、またロイ・マクリディスのような比較政治学者を親友にもつため「政治発展」論には早くから関心が深く、国際政治学者の中では独特の領域を築きつつある一人といえよう。

本著は、十六世紀以後の世界諸国家の政治史を克明に分析した結果、その「政治発展」を四段階に分ち、その各々の段階における政治機能の相違を解明したものであるが、著者もその序論において断じているように、これはあくまでも試論である。かつて W. W. Rostow が、“The Stages of Economic Growth”(1961)によって経済発展論争を巻き起こしたように、本書が、停滞している政治発展論に活を入れることを著者は望んでいるのであろう。

—

著者の定義によれば、「政治発展とは、国家的目的のため、その国の人的、物的資源を利用する政府能率の増大過程を指す」ものである。このような政府の能率は絶えず増大していくものであるが、政治発展には今一つの面がある。すなわち、政府の主要機能は、その国家が一つの段階から他の段階に移るにつれて変る。各段階において政府は、過去の機能を一層強化すると同時に、新しい機能を果さねばならない。世界中の国家が未だ幼稚な段階にあるときには、政治的に発達した国家とは、政治的統合をとげた国家のことであった。次の段階では、発達した政治体制とは、単に統合した国家であるばかりでなく、産業化に成功した国家のそれを意味するようになった。今日では、政治発展は、国家的統一、経済的近代化とともに、福祉国家をも含むようになっていく。そして明日の世界では、これらすべての機能に加うるに、政治的責任を伴うオートメ化経済が、政治発展の必要条件となるであろう。

かくして著者は、政治発展を次の四段階に分かつ。(一)初歩的統一の政治、(二)工業化の政治、(三)国民福祉の政治、(四)豊満の政治。初歩的統一の政治は、国家の誕生とともに始まる。西ヨーロッパの多くの国は、十六世紀までにこの段階に達していたが、非西欧世界では、ヨーロッパ植民地の確立によつて民族国家の形態が生じたところも多かつた。そして、この初歩的統一段階の終了は、その国の産業化の開始すなわちW・W・ロストウが、「テーク・オフ」という経済用語で説明している時点とほぼ一致する。この時期には、先ずなによりも、その領域内にある全領土と全人民に対し、中央政府の統治権を確立することが基本的テーマであり、次いで、その国内に存在する様々の分裂要因を押えて、確立された国家的統一を維持しなければならぬ。また、自給自足に頼つていた地方経済を、国民経済の域に高めねばならぬし、新しい官僚と政党の創立によつて、政治的支配を村落のレベルにまで拡めねばならない。だがこれらの努力にもかかわらず、統治者と被統治者間の断絶は大きく、意思の疏通はほとんど行われぬ。要するに、統一は未だ「幼稚」なのである。

次に来るのが「工業化の政治」である。工業化の到来とともに、国家の形態も機能も変る。新しい階級が権力を握り、新しい経済体制が確立され、市民大衆も遂にその国家の眞の成員となる。現在までのところ、発展過程にある諸国家は、三つの異なる型の政府によつて統治されてきた。ブルジョア型(西欧民主主義型)、スターリン型(この段階での共産主義政府型)、それにファッシスト型である。

今日工業化の段階に近づいている諸国家は、これら三つの型のうちの一つを選ぶか、或いは未知の新らしい型を求めねばならない。

第二段階にある政府の主要機能は、経済的近代化を助けることにある。事実、全く異なるかにみえるブルジョア型、スターリン型、またファッシスト型のいずれの政府も、(一)政治権力を伝統的エリートの手から取上げて、経済の近代化を図る工業経営者の手に移すこと、(二)工業化にとつてもつとも必要な資本の蓄積を助けること、(三)農村から都市への大規模な人口の移動を奨励すること、に努めた。この段階では先ず工業エリートが、次いで徐々にではあるが大衆が国民意識をもち始める。大衆が政治に関心をもち、政治への参加を要求しはじめるのもこの時期においてである。

第三の段階すなわち「国民福祉の政治」は、完全な工業国家の政治である。第二段階で成長した国民と政府間の相互依存関係は、第三段階で完全なものになる。国家権力は、国民大衆の能力に依存するところ大であり、一方国民大衆と産業の支配階級も、不景気や戦争の破滅から彼らを救つてくれることを国民政府に強く期待するようになる。

政府の主たる機能は、前段階とは全く変る。第二段階における政府の主要任務は、国民の生活水準向上の要求を押さえて資本の蓄積を助けることにあつたが、第三段階における政府の任務は、工業化によつて生じたひずみから国民を守つてやり、経済を円滑に運営し、国民に一層高い生活水準を保障し、不利益をうけた者を助けることにある。

大衆デモクラシーの制度の下では、組合活動等を通じての経済力の向上、選挙権の拡大等による政治力の増大のごとく、一般大衆の権限は拡大され、それが、大衆の擁護という新しい任務を国家に与える。しかし、福祉国家は大衆デモクラシーの下でのみ要求されるとは限らない。ヒトラーのドイツやフルシチョフとその後継者のロシアもまた国民福祉の政治を行なつてきた。恐らく、経済的に発達した国の政府はすべて、その国の生産性と権力を増大させ続けねばならない。そして、経済を円滑に運営し、一般大衆の経済的、社会的福祉のための主要責任をとるために、政府は多かれ少なかれそれに干渉しなければならぬようである。

第四の段階は、「豊満の政治」とでもいうべきものである。未だこの段階に足をふみ入れた国はないが、アメリカや西ヨーロッパ諸国のように、まさにその門口に立っているものは多い。それはオートメーション革命とも呼ぶべき新しい産業革命の開始を意味する。それは、かつて産業革命がもたらしたように、過去のあらゆるものを粉碎し、社会的大混乱をもたらすであろう。そのため新しい政治形態、新しい政治機能が、この変容過程を円滑にし、その革命の結果を維持するために必要となる。

ではこのオートメ化された社会は、どのような政治的社会的構造を必要とするであろうか。それを予想することは困難ではあるが、この「豊満社会」は次のような特性をもつものと思われる。(一)非常に高価な機械の使用と計画生産が必要であるため、高度の経済力の集中が起る。(二)高度の経済力の集中は、巨大企業と政府との関係を

極めて緊密にし、政治力も高度に集中化される。(三)高級技術労働者や技術者を背景にして、経済と政治を運営する少数の計画立案者を頂点とする新しい階級構造が誕生する。

この新時代の政府の主要な機能は、このオートメを可能にし、そのオートメ化された経済に政治的責任をもたらすため、社会の再編成を行うことである。高度の経済力の集中とともに、今日大衆デモクラシーの下で見られる国民と国家間の相互依存関係は崩れるであろう。オートメ化とともに、国家の国民大衆への依存度は薄れ、逆に国民大衆の国家への依存度が高まるからである。第四段階にある国民政府は、この高度に集中化された経済が生み出す重大な混乱をおさめる政治的責任をもたねばならない。しかし、国民政府がこの仕事にもつとも適しているかどうかは疑問である。オートメ化された工業は、国際市場の安定と国際平和の保障を求め、結局はそれが国民国家の終焉、そして地域的或いは大陸のブロックの形成といった形に発展するかも知れないからである。

著者は、最終章の「国家の選択」において、いかなる国家もこの四段階を経過しなければならないが、「それをスピード・アップすること」、および各段階で「どの道をとるか選択すること」はできる重要な第二段階では、ブルジョアの漸進主義をとるか、スターリンの近道を選ぶか、共同支配型をとるか、或いは新しい道を見出すか、の選択の自由があるし、第三段階では、大衆デモクラシー、共産主義、あるいは全体主義といったもの一つを選ぶ自由をも

つ。現在のところ第四段階は全くの未知数である。

第二次大戦後植民地状態から解放された多くの新興諸国は、現在第一段階にある。早晚かれらも第二段階にさしかかり、どの道をとるかの選択に迫られるであろうが、かれらが急速な発展を欲しているにもかかわらず、そして大衆の政治化が進みつつあるにもかかわらず、発展の速度が非常に鈍く、国内には伝統的エリートの勢力が根強く残っている現状をみると、ブルジョア型民主政治への期待は余りできないように思われる。十九世紀に工業化した国がすべて、ブルジョア型政治を選んだのに対して、二〇世紀に工業化が進んだ主要国が大半全体主義に向かつていったことは参考になるであろう、と著者は結んでいる。

三

今日国際政治を学ぶ者、特に後進地域の政治研究を行なっている者の間では、政治発展理論の開発を望む声が頻りである。確かに、第二次大戦後独立した約六十の国家のほとんどすべてが、未だその国家的統一すら充分に完了していない現状で、今後果していかなる政体を採用して、いかなる政治発展をとげるか予断を許さない。東南アジア地域をみても、オルガンスキー教授のいう「初歩的統一の政治」の段階に入ったばかりの十余の新独立国の大部分が、第二次大戦後西欧型ブルジョア民主制度を採用してはみたが、現在その多くは失敗に帰し、遙かに権威主義的政権がそれとつて変つていく。国家的統一と国民の一体感の育成を主目的とする第一段階にお

いては、西欧型デモクラシーを育成しようとすること自体無理なのであろうか。そこで必要とされるのは、何よりも強力な武力を背景とした全体主義的政権なのであろうか。また、やがて「離陸」の段階に達した後進諸国が次に選ぶのにいかなる道があろうか。

こういった後進社会研究者にとつてもつとも基本的なパースペクティブを与えてくれるのが政治発展理論であるが、従来のところ唯物史観に基づくマルクス政治学理論の側から与えられたものがあるのみで、比較政治学の側からの政治発展論は少なかつたようである。従つて、オルガンスキー教授が、十六世紀以後の世界の諸国家の政治発展のあとを追跡し、極めて幼稚な国家的統一達成の段階から、工業化に全力を挙げる第二段階、福祉国家に力を注ぐ第三段階を経て、未知のオートメーション時代に至る四段階論に分析、その理論的研究を発表したことの意義は大きい。教授自身が認めているように、本書は未だ試論の段階にあり、とりわけ古今東西の膨大な歴史を広く追わねばならない本研究の性格上、批判すべき点を見つけて出すのは容易である（たとえば、八二頁から九一頁にかけての日本の分析はわれわれ日本人を満足さすものではない）が、複雑多岐にわたる世界各国の政治史を分析、整理して、政治発展のパースペクティブを明確に我々に提示してくれた努力には心から賞讃の言葉をおくりたい。一読の価値ある書である。

（松本 三郎）